



第6回

## 歌川広重 「東海道五十三次之内 土山」

4月23日(日)まで、広重美術館の展示室1では、歌川広重「東海道五十三次之内」シリーズを展示しています。

天保4年(1833)ごろに江戸と京・大坂を結ぶ東海道をテーマにしたシリーズ「東海道五拾三次之内」(保永堂こと竹内孫八から出版されたため俗に保永堂版東海道と呼ばれます)を発表して以降、広重のもとには別の版元からも東海道作品の注文が入ったようです。行書東海道(題が行書体なので俗に行書東海道と呼ばれています)はそういったシリーズ

のひとつで、天保(1830-44)末期ごろの制作と考えられています。

「東海道五十三次之内 土山」(3/25~4/23展示)を見てみましょう。坂の下宿から土山宿へ向かう際の難所、現在は三重県と滋賀県の県境に位置する鈴鹿峠の様子が描かれています。中央の義姿の二人は、大名行列が持っているような槍と両掛にした挟箱を担いでいますが、彼らは人足でしょう。後続の赤合羽姿の中間らしき二人がその雇い主かもしれません。

鈴鹿峠は雨が降ると地面がぬかるんで歩行に困難な危険な場所でした。図中でも、暗雲立ちこめる空から雨が白い線となって降りつけ、彼らの足は足首まで泥に埋もれてしまっています。しかし彼らの表情を見ると、その状況とは裏腹に飄々としていて何とも楽しそうです。

行書東海道は、簡単な筆線で構成された淡泊な画面や、滑稽な人物表現などに特徴があります。決して凝った作品ではありませんが、保永堂版東海道とは違った味のある作品です。

なお、展示室2では、3月21日(火・祝)まで企画展「江戸の大衆文化と行楽展」を、3月25日(土)~4月23日(日)には「春夏秋冬の暮らし」を開催していますので、あわせてご鑑賞ください。

(学芸員 折井貴恵)



歌川広重「東海道五十三次之内 土山」横間判 天保(1830-44)末期ごろ 当館蔵

### ミニギャラリー 作品募集!

あなたの作品をここに出品してみませんか?

絵画、写真、絵手紙、手芸などの作品をお待ちしております。

申込み・問合せ・企画財政課

☎0287-92-1114

版画「おはやち」  
菊池崇敏さん(矢文)



### ミニ ギャラリー



フクジュソウ  
青木信夫さん(小川)